かんど再発見（No.75）

花月（はなつき）石切り場の思い出

保知石の奥、芦谷の滝から東へ向かう道の左右に石切り場跡がある。そこから更に進むとかつては花月の集落があった。

私の一番古い記憶は昭和23年（4歳）頃と思う。祖父（勇吉明治27年生）に連れられ石切り場に毎日のように通った。そこには12軒がそれぞれ経営する石材加工の団地ができていた。近しい者同士で集まり3つのグループがあったように思う。朝7時頃、祖母が作る竹皮に包んだ握り飯弁当を肩掛けにし祖父に同行した。石切りの工房では終日祖父の仕事を眺めたり、勝手知ったるよその工房に入り込み昔話を聞いたり、近くの小川で沢蟹を獲ったりした。お昼は囲炉裏でお茶を沸かし、その蟹や魚の干物を焼いておかずにした。仕事は夏が7時、冬は5時頃まででひねもす充実した日々を過ごした。小学校にあがってからも1年生は学校が半日で終わったので走って帰り、祖母から温かい弁当を受取り祖父が働く小屋へ通い2人で食べた。ほかのおじさん達から「新屋（あたらしや）（筆者の家の屋号）のおじじは温（ぬく）い弁当でいいの！」と羨ましがられた。

祖父の1日はまずその日に使う道具の手入れではじまる。鞴（ふいご）で炭火を熾（おこ）し、大小の鏃助（やすけ）を刀鍛冶がするように鍛え、刃研ぎに1時間はかけた。鏃助で1日中石を削り様々なものに形を整えた。ここの石の細工し易く熱に強く粘りもある性質を生かして、竈（くど）・棟石（むねいし）・束石（つかいし）・炬燵（こたつ）の火櫃（ひびつ）などをつくった。特に祖父は竈が得意で毎年多数の注文が来た。焚口が2口の竈は、間に銅壺（どうこ）(注)という湯沸し器を挟む形の効率的合理的なものであり、販売先は大津や大社辺りまであった。

お客から竈の注文があると現地へ出向き、据え付け場所を実測し3カ月ぐらいの納期を決めた。納品の前日午後から同じグループ内の者3人が手伝いに来て、仮組の竈を分解し1個ずつ筵（むしろ）に包み、藁（わら）で作った当てを間にかませて大八車に積み込む。急な下り坂もあるため、3人がロープで後ろから引きブレーキをかけながら我が家まで運びその日は終わる。翌朝5時頃祖父・祖母・私で出発する。神戸川を越えて行くときには、難所の古志橋を3人が力を合わせて渡り、平坦なところでやっと朝食の弁当を食べる。据え付けは煙が漏れることなど無いように慎重に組む。お昼は2つ目の弁当だ。ほとんどの家で汁や煮物を出してくれた。3時頃には仕事が終わり空車（からぐるま）を引き帰途につく。アイスキャンデー、キャラメル、饅頭などを買ってもらい、楽しく話をしながら家路についた。そんなこんなが小学2年生頃まで続いた。

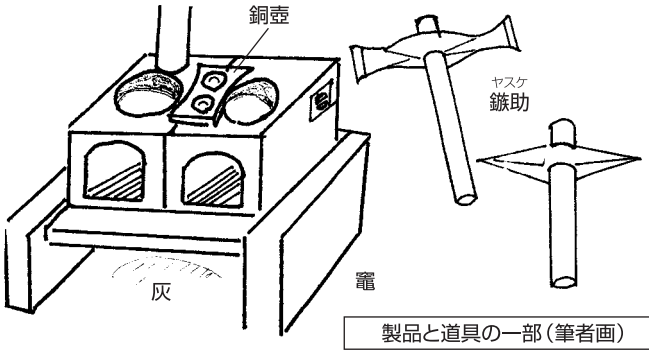
しかしその後、工房は建築様式の変遷や燃料革命の波に抗しきれず昭和30年代前半に閉鎖したと思う。

今にして思えば、物や娯楽は少なかったが、楽しさ、喜びは今の子どもたち以上にあった気がする。

（注）銅壺：銅製で金物屋から仕入れた。

（神門ヒスタム会員　原　貞幸）

石切り場跡（一部）



製品と道具の一部（筆者画）